

第5回伊藤喜栄塾・地歴学講座（要旨）

0. はじめに

・ 文藝春秋の元編集長で作家の半藤一利が書いた『幕末史』は、慶応大学の市民講座で12回のお話をまとめたものだそうだ。聴衆はコンスタントに25人程度。その前に書いた『昭和史』は、平凡社のバックアップによるものだが聴衆はわずか4人だったらしい。それに比べれば、この講座の方がはるかに多く、皆様のご協力に大変感謝している。講座で話した内容もまとめられているので、役に立つのではないかと思う。この講座では、本に書いていないことを話している。 4:00

1. 前回（シンポジウム）の復習

・ 伊藤（清武）さんは、地方の工業都市のお話をされた。どこも工業が集積することで利益が出る。下請け、外注など。アメリカでは取引費用（transaction cost）と言って、機会が多いということが結果的に費用の節約につながる言われている。しかし、ここ20年あまりの間に、町の中の工場がなくなり、虫食いになっている。それをどうするというので、工と住が一体化したコミュニティが必要ということで産業コミュニティを話された。問題は、従来どおりの「工」で可能かどうかだが、夢をもう一度という工業都市はおそらく不可能だと思う。一宮では、かつて繊維とりわけ毛織物で栄えたわけだが、もう一度、毛織物は無理だろう。虫食いに穴の開いたところをどうするかということがまちづくりの課題になっていることを話された。実は、集積利益がなくても、優良な技術を持っているとか、企画力、営業力があるところは、生き残っていく。しかし、それは数少ない。その例として、タオルで有名な今治がある。生産業者は減少しているが、しっかりとやっている。もうひとつ、イギリスのシェフィールドは、製鉄業の発祥地。古い鉄工場が潰れて廃墟のようにになっているが、特殊な金属加工は残っている。集積利益が必要ないぐらいに力をつけるとものづくりとして残っていく可能性があるが、まちの雇用効果にアジャストできるかどうかは限界がある。だから、別のものを探さざるを得ない。それがベーシックインダストリーで、所得をその都市で生み出すもの。どうやって見つけていくかが重要。 10:00

・ その手掛かりになるのが、佐々木の言われた「社会再生産業」。国土環境再生領域、福祉社会再生領域、地域文化再生領域を上げられた。どうやるかということで、佐々木さんは、とにかく地元の知恵、カネでやれと。その可能性に対して疑問があったので、私の方からは、長野県の旧平村の事例などのお話をした。村民に株を買ってもらって資金をつくり、自前で電子部品の工場を立ち上げたが、必ずしも上手くいっていない。短期的にはいい。地元の金融機関の支援があれば2、3年は延命する。しかし、次第に上手くいけなくなり、潰れても話題にならなくなる。やはり、ベーシックインダストリーを探さなければいけない。ここがカギであろう。そのヒントになるのは、イギリスでサッチャーが、ロンドンへの集中を止めるべく何をやったかということ、官庁を田舎に持っていった。すぐに必要なものはロンドンに留めたが、特許庁はパックストンという人口2万人ぐらいのまちに持っていった。運転免許の管理はウェールズのスウォンジーという炭鉱のまちで、雇用効果は6,000人程あると聞いた。ベーシックインダストリーは民間だけで考える必要はない。第三セクター、外資でも構わない。 15:00

・ 今枝さんは、一宮の産業的再生は「起」からということで話をされた。産業にとって、一宮の中心部の方は、必ずしも基盤がいいわけではない。旧尾西はももとの産業基盤が、ものづくりをベースにつくっているから、条件が整っている。だから、起からだということである。ただ、われわれのイメージではもう一回、毛織物と思うので間違ってしまう。そこを切り離して、どう新しいところへ行くか。そこで思うのは、これまでも話をしているが、「コナミ」。これを活用して、スポーツに関わるものなど、市内のポテンシャルに結びつけていけないかと思う。もうひとつが、木曾川の河川の雄大な流れの活用したスポーツ絡みの観光産業。これは待ちの姿勢ではできないだろう。もう40年も前になるが、『東海の伝統工芸』という本を書いた。豊橋の筆、有松の絞り、関の刃物など。潰れたものが多いが、資料的価値はあると思う。 20:00

2. コミュニティとは何か

・ 残りの地歴学講座では、生活空間という観点から、コミュニティと郊外について話をしたい。今日はコミュニティについて。コミュニティについて、都市計画の方では、最近まであまり議論されて来なかったと聞いた。地

理学もそれほどしっかりとやっていない。真面目にやっていたのは社会学だろう。私は、前にも言ったように「地域」へのこだわりが強い。いい加減な使い方をする人には問い糾すようにしている。有名な経済学者と話をしている、「地域」を頻繁に使うが、何回聞いてもその意味するところがわからない。どうやら、「そのあたりのこと」を「地域」と言っている。論理的に行き詰まった時に、このことばを使うと通ってしまう。そういうニュアンスがある。地域政策、地域開発などと使うが、その「地域」が定まらなければ、開発のしようもない。コミュニティも同じような意味合いがある。論理的につながらないところがつながるような感じがしてしまう。多義的にことばの意味が使われている。学問の世界では、使わないで済むならば使わないことが多かった。23:00

・ところが、3・11の東日本大震災以降、コミュニティに関わる議論が増えてきた。そこから混乱が始まる。まず、コミュニティとCommunityが同じか違うかということだが、もともと違うはずがない。英語のコミュニティ、ドイツ語ではゲマインデ。ところが、3・11以降の議論では、カタカナのコミュニティの意味がズレてきている。広がったというか、あいまいになってきた。絆=コミュニティ、あるいはコミュニケーションの変形、類語としてのコミュニティの使われ方が多くなっている。これでは大変なことになる。英語圏では、絆やコミュニケーションをコミュニティに含ませることはあり得ない。人間と人間の間接性を表すことばは多い。ソサエティ、アソシエーション、フレンド、グループ、フェロー…。それぞれ、状況によって違う意味を持っている。だからコミュニティも英語の意味に限定しておかないと日本の学問のガラパゴス化になりかねない。国際会議で議論できなくなる。カタカナ英語の流行は問題である。例えば、オルゴールは英語圏では通じない。ミュージックボックスである。27:30

・ごちゃごちゃになったコミュニティの概念を元に戻したい。一番まじめにやってきたのが社会学で、社会学辞典にある根本は「地域性」と「共同性」の二つ（資料1）。共同性だけだとソサエティと同じ意味。われわれは、社会と言うとき、人間と人間の共同性を意味する。それに対して、コミュニティは地域性という限定性を持っている。だから、地域性の限定がないものは、英語のコミュニティにはならない。そう考えてもらえば、厳密ではないがアイコールだろう。その地域性には二つの意味がある。ひとつは「地域特性」ということで、これは、一宮と北海道では場所ごとにコミュニティの中身が違うことを意味する。もうひとつは、範囲が問題で、「空間的限定」ということ。共同性にも二つ意味がある。同じようなものが共同する「類似性」ということ、また、異なったものを含めてひとつとなる「異質性」ということ。コミュニティやソサエティの共同性は、この異質性にウェイトを置いている。似た者だけが集まっているのでは、必ずしもコミュニティやソサエティには合わない。例えば、この「伊藤塾」はコミュニティか、考えてみていただきたい。最近よく使われているのが、インターネットコミュニティ、ラインコミュニティ、フェイスブックコミュニティ。これらは、地域性にも共同性にも合致しない。ソサエティはともかく、コミュニティには、少なくとも地域性、共同性、異質性が必要で、同じ者だけが集まって作っているのはコミュニティの概念に合わない。32:00

・カタカナのコミュニティの例として、広井良典氏、山崎亮氏などが、特に、3・11以降、有名になって来た人たちである。ある特定の時間を決めて、志を同じく、趣味あるいは手段を同じくする人たちの集まりで、老人会も女子会も子ども会もみんなコミュニティになる。これは、本来のコミュニティではなく、アソシエーションやフェローという英語に対応するもの。こういうことが、政府の審議会などで議論されるというのは由々しきことだと感じる。例の秘密保護法ばかりで、一人歩きをするとどうということになるか。わかりやすい例では、地図に丸い白抜きができるということで、カーナビも特定の場所はぼかされてしまう。軍事秘密の場所の穴空きの地図は戦時中にもあった。私は陸軍幼年学校の生徒だったので手に入れることができた。

・広井さんは、3つのコミュニティを取り上げている（資料2）。生産のコミュニティと生活のコミュニティ、農村型コミュニティと都市型コミュニティ、空間のコミュニティと時間のコミュニティで、この三つめが問題である。生産のコミュニティと生活のコミュニティ、農村型コミュニティと都市型コミュニティは、今日お話しする空間の限定性と関連がある。問題は「時間のコミュニティ」で、一定の時間、仲間が集まって何かをするというもの。これは、外国には通用しないナンセンスな議論である。40:20

3. コミュニティの伝統的な意味

・もともとコミュニティはどこから来たのか。歴史学に蓄積があり、共同体と言われてきた。洋の東西を問わず、

今日の集落に発する。これが制度となって自治会、町内会と呼ばれるものができる。これが自然発生的なものである。イギリスでは、大都市圏ではないところは、今でも基礎自治体として機能しており、人口 500 人以上の集落は自治権があり、議会を持っている。ここで決まったことは行政的にオーソライズされる。500 人を割ると、大きな自治体の下部組織となる。ロンドン、マンチェスターなどの大都市はやっかいで、最終的には「小学校区」に集約される。小学校がコミュニティセンターの役割を果たしている。フランスの基礎自治体はコミューンと呼ばれる。ドイツ語はゲマインデ。では、どうやってできたか。コミュニティを考える場合に、人と人を直結すると間違ふ。間につながるものが必要。つながりということは、生き続ける＝生存ということであり、これは一代ではなく、先祖代々生き続けること。これが媒介となって人と人とが結びつく。こうなると、仲がいい悪いと言っていられない。ここからはずれると命が危うくなるということ。だから、村からはみ出した者は、ロンドンのような都に行って、そこで落ちぶれて暮らすことになる。江戸時代の人足寄せ場もそれに近い。彼らは、犯罪者ではない。村からはみ出した者が、戸籍無しは無宿人となって働くか、物乞いになる。これが、農村型コミュニティ＝I型のコミュニティである。歴史学では、このI型が大部分を構成する。これがしっかりしていないと社会が成り立たない。これは、洋の東西を問わない。当然、姿・形は違う。日本は稲作をベースとした農村型であるが、牧畜をベースにしたヨーロッパ、あるいは小麦生産を中心とした農村型、狩猟をベースにしたものもある。そして、これを維持するためには、民主主義では上手くいかないケースが多いので、一般的には封建制と結びつく。歴史学の方では、共同体は否定の対象であり、近代にはあまり関心がない。

- ・ 歴史学ではコミュニティのI型が重要であるが、歴史の発展によって都市型であるII型が出てくる。都市型とは、社会が発展、安定すると支配者の集住、商人の集住という現象が起こる。支配者が住めば、家来、召使い、使用人がくっついて来る。これが「都(みやこ)」となる。そして、ものが余ってきて、それを交換するために「市(いち)」が立つ。近代以前の都市の形成はこの二つが主体で、他には宗教による寄進に基づく都市がある。支配者は少ないので、都は数が少ないが、市の方は結構ある。彼らの生活は、I型コミュニティの食糧生産に支えられるので、I型がしっかりしないとどちらも成り立たないことになる。 53:10
- ・ 社会学の方では、「地域社会」という言い方をする。社会学は古いものには基本的に興味が無いので、近代社会に対応して、先進国ないしは資本主義を前提とする。広井さんのコミュニティ論は、社会学の影響を受けているようだ。社会学では、農村型と都市型の双方の関係については、あまり議論しない。田舎では農村型、都市に行けば都市型という感じである。中身は何かと言えば、地域社会ということで、地域という限定性が入ってくる。ここでソサエティとコミュニティの区別をしている。
- ・ では、私のいた地理学はどうか。行政村に対して、自然村という言い方をする。行政村は、明治以降、行政区画に基づいてできたもので、自然村は歴史学で言う共同体、集落に似ている。地理学では、都市の中の地域社会にはほとんど関心がなく、避けてきた。
- ・ まとめれば、コミュニティについて、歴史学の蓄積が大きく、これは世界共通である。どちらかと言えば、ネガティブにとらえており、共同体は破壊の対象となってきた。社会学は現状を見ながら、実際にあるのは農村型と都市型で、近代化が進めば都市型が増えて、農村型は衰退していくという見方がされている。 56:00

4. 地歴学からのコミュニティ試論

- ・ 「絆」と言われるものは、全て包括してコミュニティということで処理しようとする。英語圏では、絆をコミュニティとすることは無い。田舎であれ、都市であれ、身の回りの地域社会を言うのであり、ドイツ語のゲマインデ、英語のコミュニティ、日本語の共同体も同様、封建的なものである。ソサエティに相当するドイツ語はゲゼルシャフトであり、これは共同性はあるが空間的な限定性には拘らない。近代社会では、利益に基づく共同性が中心になる。今日の資料に入れた『ゲノッセンシャフトの可能性』の論文は、殆ど日の目を見なかったが、21世紀のコミュニティ論に対応するものと考えており、ゲノッセンシャフトとしてのコミュニティを書いている。身の回りの「近所」のことが書いてある。ゲマインシャフト的なものは、メンバーが自覚しているわけではないが、ゲノッセンシャフトはそれに近いようなものを人間の知恵で相談してつくりましょうというものであり、そういうものを作らないと社会、世界が崩壊していくということである。知恵を出し合い、労力を出し合い、ボランティアでいいから、身の回りの社会を自覚的につくろうというものである。日本社会は単一民族に近いが、旧

植民地のような多民族化の進行しているところでは、低賃金労働者を巻き込んで近所を作っていないと社会がもたないことをヨーロッパは自覚している。62:40

・先ほどの農村型のⅠ型のコミュニティは、[人×生存×人]と表せる。ここからはみ出すと死んでしまうということであり、これが出発点だと考えていただきたい。では、都市型のⅡ型のコミュニティは、どういう特色を持っているのか。食糧は周りの農村に依存する。都市は行政中心とマーケット中心であり、周りにⅠ型のコミュニティを付属品として一杯持っている。これがないとまん中は生活できない。余談になるが、イタリアやギリシアの都市国家。なぜ、都市と国家が結びついたのか。例えば、フィレンツェは、中心部はアジアとの貿易で儲けるが、食糧調達に周りの農村をベースにせざるを得ず、周りの農村は封建領主と同じように領地として支配することになる。近代化すれば、都市は都市だけで食えるようにならないといけいない。だから都市国家は中途半端と言える。Ⅱ型は、[人×日常生活×人]で、日常生活とは、毎日の生活が何世代、何百年にも渡って続くというものである。Ⅰ型もⅡ型も、地域特性と空間的限定性、共同性を持つ。歴史学の共同体は、間に土地を介在させているので、[人×生存×人]となるが、社会学のコミュニティ論は、間を考えないで、人と人を直結する。だから、コミュニティの本質に迫れない。肝心のつなぐ接着剤のところあまり見えていない。社会科学をより設定し、絞っていくのと、社会の現象に限定して調べていくところに違いが生まれる。その両方をつなぎ合わせていこうとするのが地歴学である。69:00

・私の考えるコミュニティは資料3に整理した。縦軸に農村型と都市型、横軸には伝統社会と近代社会を置いた。伝統社会は自給自足+ α (プラスアルファ)、近代社会は市場経済+ α (プラスアルファ)。伝統社会は基本自給自足で、余ったら売る。市場経済社会にも自給自足部分がないわけではない。実は、この伝統社会と市場経済社会の二つの間に現実の姿がある。ここでは「遷移」と表示してある。実際は、突然、Ⅰ型からⅡ型になるわけではなく、この「遷移」に最もリアリティがある。この間の橋渡しのところをどう認識し、どう処理するかが社会科学では非常に重要なことである。型を見つけて、型を証明しても役に立たない。伝統と近代の間に、先ほどの都市国家のことが書いてある。兼業農家のむら、出稼ぎなど。自給自足でやっていたが、現金収入が必要だから、兼業あるいは出稼ぎに出ざるを得なくなる。ヨーロッパのドイツ、スイスのむらを調べてみると、兼業で成立しているむらは結構多い。ポルトガルやスペイン、南イタリアなどは出稼ぎで埋めている。また、農園主が、奴隷ないしは奴隷に近い低賃金労働力の商品生産によって儲けるスタイルがもうひとつのタイプであり、プランテーション、ファゼンダ (ブラジルのコーヒー農園) が該当する。

・余談であるが、これに関連して、『ユニクロの光と影』(文藝春秋社)という本を紹介しておきたい。ユニクロは、このプランテーションと同じようなやり方を縫製加工でやっている。中国の農村の奴隷に近いような労働力を使って安く作って世界に売っている。日本にあるのは企画営業、管理部門で、モノを作るのは世界中の低賃金労働力である。しかし、近年は中国の賃金が上がって安くできないので、バングラディッシュに主力を移そうとしている。じゃ、その次は、アフリカか、ということになる。今から20年ぐらい前だろうか。「ファブレス」というのが流行った。工場を持たない製造業であり、ユニクロの場合は製造小売をグローバルゼーションとして展開している。製造卸は以前からあり、問屋が農家に下請けに出してものを作って、集めて出荷する。それをさらに進めれば製造小売になる。ユニクロのように、ここまで延長したのは世界的にはそれほど多くない。このあたりで例えば、本町にあったスズヤ、ハヤシマンのクラスの洋服屋がユニクロになったようなものである。ベーシック、ノン・ベーシックの話と関連させれば、ユニクロは宇部市のノン・ベーシックから始まっている。だから、やりようによっては、ノン・ベーシックでも世界的企業に成り得るということである。ただ、光に対する影の部分も凄い。重役クラスも3、4年平均でクビになっており、従業員の定着率も半分程度だと言う。一宮の人たちは人がいいから、そこまで阿漕にできなかったと言えるかもしれない。

・話を戻す。言いたいことは、この表の「遷移」のところに意味があるということ。農村型の現代の姿は、近代的な農村で、家族経営。基本的に金儲けのために農業をやる。だから、農業なら何でもいいわけではなく、金儲け農業をやらなければ近代社会としては成立しない。そこでTPPが関わってくる。外国の農産物に小農経営で対抗できるかどうかということ。ヨーロッパのスイス、イタリアは、兼業農家で近代的農業をやれるような仕組みを作っている。農協が農家の生産を助けて、野市の農業でも金儲けができる仕組みを導入している。それでTPPのようなものにも抵抗してやっていける。日本でもそういう農家はいるが、農協は補助金をもらう方にウェイト

をかけるから近代化しない。減反政策が典型。むしろ余った米は政府が買い上げて、品質管理の方法を考えて輸出することを考える。そうして、和食は日本の米じゃなければとなればマーケットは広がっていく。農協は、輸出産業としての農業を考えて来なかった。これを大規模にやれば、アメリカ型の近代農業になる。アメリカの場合は、余った農産物は政府が買い上げて保管することを昔からやっていた。脱脂粉乳というのを憶えておられるだろうか。支配国にタダ同然で配っていた。85:00

- ・次に、近代の都市型。ここが一番ややこしいところで、先進国で共通して課題となっている。[人×生活×人]がⅡ型を考えるカギであった。ここに、「生産」が入ってきた。また、メンバーが「人」から「企業」に変わってきた。生活もあるが、どちらかというとなら生産が主体となる。それで、[企業×生産×企業]に変わった。この大きな切掛けが産業革命。ここで、企業は国になる場合もある。EUの母胎であるEC。くつつく単位が国になってしまったのがEC。要するに、ECに入らないとヨーロッパの中で国として生き残れない、スイス以外の国々はここに入らないと存続が難しいと感じている。かつて侵略されたドイツが嫌いだと言っていない。産業革命の結果、こういう現象が起こってきた。企業の生産が増大すればする程、儲けが大きくなる仕組みが資本主義。アダム・スミスは近代経済学の出発点と言われているが、彼は手工業での大量生産で資本主義を考えていた。産業革命で大量生産が飛躍的に伸びる考えは頭の中になかった。手作りで大量生産して儲けが増えれば国富が増すと考えた。というのは、ワットの蒸気機関の発明より、スミスの『国富論』が少し前。
- ・産業革命による商品生産。ものには二つの側面がある。商品と単なる「もの」。後者は使えば役に立つ。使用価値である。しかし、使用価値を持っているものは常に交換価値があるわけではない。使用価値が100あっても、交換価値がゼロのものがある。空気がそうである。その逆で、使用価値はほとんどゼロだが交換価値が高いものとして、コンピュータの中で投資されるお金がある。産業革命によって、商品生産が増大した。その結果、コミュニティのメンバーが人から企業に変わっていく。そういうことを表現しているのが、「ファクトリー・コミュニティ」ということばである。始まりは、アークライトによるもの。近代紡績業の始まりで動力は水車。これより古いのは、ローカル・コミュニティと呼ぶ。ファクトリー・コミュニティの対概念としてローカル・コミュニティが出てきた。ファクトリー・コミュニティとしてイメージしやすいのは、俗に言う「企業城下町」だが、これは偽装表示に近い。マスコミがそう呼んで使っているだけである。企業城下町をどう英語に訳せるか、どこに城があるのかと言いたい。別の言い方を探せば、「カンパニータウン」だろう。
- ・ファクトリー・コミュニティは、[企業×生産×企業]と表せる。この生産のためには資本家、労働者の日常生活が必要で、ここで労働者の街ができる。アークライトのつくったファクトリー・コミュニティとして有名なのが、イギリスのクロムフォードというところにある（図●参照：工場に歩いて通える範囲 ダーヴェント川 国立公園で景色の良いところ 上高地のようなところ その一画に工場があって、水車がある 鉛の鉱山から地下水を取っている ホテル、購買、労働者住宅）。ここで問題になるのが労働者住宅である。村の人たちは牧畜で生活が成り立っているからこのような怪しいところに働きに来ない。だから、ロンドンから浮浪者の家族を連れて来て住まわせて、低賃金で雇うことになる。また、ロンドンには孤児が一杯いる。それを教会が預かることになる。これが、孤児院の始まり。救貧法に基づいて、各教会で預かっている孤児を連れて来て働かせる。孤児たちは、数も数えられないので、ここで教育を行う。イギリスの義務教育は、工場労働者の教育から始まったと言える。日本の社宅はここから来ており、このイギリスの状況と同じと言えるかもしれない。だから、社宅の評価は難しい。また、ものが何もないので、この購買部で「ツケ」で買うしかない。給料と相殺で買う。購買部は経営者がやっていて、当然、高い。それに対して、労働者が相談して作ったのが生協/生活協同組合である。イギリス北部の労働者が団結して生活物資を安く手に入れることから始まった。マンチェスターの郊外にロッジデールというところがあり、そこが生協運動の発祥地となっている。こうして、農村の中に、ファクトリー・コミュニティができて、今度はこれが増えていく。初期の工場は水車なので、まだ自然破壊は大きくない。また、水の取り合いになるので、ひとつの村にひとつの工場しかできない。労働者の日常生活を快適にするために街づくりをしなければいけないという問題意識がここから始まると言えよう。102:00
- ・蒸気機関の発明がなぜ問題なのか。生産活動がどんどん活発化し、企業が集中する。蒸気機関がこれを可能にした。蒸気機関が中心になって企業が一カ所に集まるというムーブメントが70〜80年続く。その後、電気になる。こうしてできたものを「ビジネス・コミュニティ」と言う。日本で言う工業地帯は、実はビジネス・コミュ

ニティと言える。ビジネス・コミュニティは、近代的な都市や大都市が相当する。名古屋、大阪、江戸から変わった東京。しかし、ここではコミュニティの主体が企業になるから人間が抜けている。だから、国の政策もこのように集まってきた企業が立ち行くようにバックアップすることが都市政策の中心になっていく。そう考えると、今の公共投資もどういふものかがわかってくる。では、ビジネス・コミュニティで何が起こってくるか。ここに集まってきた大量の労働者の生活がある。稼ぐ方は会社が雇ってくれば成り立つ。では生活の部分はどうするか。ファクトリー・コミュニティの時には、それぞれの企業が社宅の形で面倒をみた。三池炭鉱などの産炭地域にあった「炭住」もそうである。しかし、企業が集まり過ぎると、無責任になって、そういうことにカネを掛けるのが勿体ない、合理化の対象となる。労働者の生活が放置されて、スラムの形成になる。明治維新の時に、岩倉使節団がアメリカ、ヨーロッパを回って来た。イギリスをお手本として見に行くが、ロンドンのイーストエンドの持参なスラムを見て、これは手本にならない、イギリスのまねをしたら大変なことになることがわかった。だからドイツへ行った。ドイツは、イギリスのこういう悲惨な状態を見て産業革命を経験している。ドイツで、スラムではない労働社会を見た。ドイツでは、ビスマルクによって社会政策が実行された。われわれはこの資本主義社会で、ダメなりにでも、高齢者の年金や医療保険など福祉型政策を利用できているわけだが、その出発点が19世紀後半のビスマルクと言える。家庭菜園のもとになったクラインガルテンもビスマルクの時代のもので、シュレーバーガルテンともいう。シュレーバーという医者が工場労働者の衛生上の視点から、家庭菜園によって環境を良くすることを考えた。1860年代だと思ふ。このように間接投資をすることが、長い目で見ると、企業対企業のビジネス・コミュニティをより安定的に維持することがわかった。

- ・これに比べるとイギリスのスラムの状況、貧富の差の大きいことは、私がシェフィールドに居た時にも実感した。シェフィールドは、1,000m ぐらいの山があつて、下にドン川が流れていて、そのあたりに工場がある。労働者住宅がくっついており、駅もここにある。そこより少し上に大学があつて、この大学から上の方に資本家の家が建っている。私はそこに住んでいた。というのは、大学が外人教師用に用意してくれた宿舎がここにあつたからである。石造の3階建てで、玄関には絨毯が引いてあつて、窓にはステンドグラス。労働者住宅との較差が大変大きい。ビジネス・コミュニティになって、スラム対策、労働者の生活環境への対応が大きな問題となった。
- ・ビジネス・コミュニティからコミュニティ問題が発生してきた。今日、お話しした英語の本に書いてあることは、絆に対応するコミュニティのことではなく、都市における貧しい労働者たちの生活、街をどうするかというものである。これに対する政策が、イギリスにおけるコミュニティ問題なのである。これに対して、イギリスでは「近隣区（近隣住区、近所）の整備」に尽きるということになる。労働者、それに類する人たちが住んでいる場所をどうやって良くするか。田舎の方、ローカル・コミュニティは伝統社会から引き継いだ「むら」が基礎自治体として機能しているので、そこで決めればよい。しかし、都市ではできないので、小学校区というものを大事にする。日本ではすぐ統廃合で小学校をなくしてしまうが、イギリスは小学校区を新しい都市型のコミュニティとして機能させようと考えている。小学校にコミュニティセンターが併設されて、コミュニティ図書館、ボランティアの語学学校があつたりする。
- ・そういう意味で、日本でも小学校区を見直すことが考えられる。資料4は、都市の例として京都の町内会。資料5は川崎市市の例。町内会別のデータが揃っていたが、活用されていなかったのだから、それを図に落とし込んでみた。対象地は川崎駅から30分程のところである。商店街はある、街路樹はそこそこ整備されている、児童公園もある、医者も結構いる。地域の人に聞いてみると、特に何かがあるわけではないが、不便ではないと言う。まあ、満足している。隣に公園があるから、日曜日には散歩したり、ジョギングもできる。近隣区（近所）とは、そういうものだろう。そうならば、無理に要望を出して対策を考える必要はない。それを小学校区で見たのが、資料6-3である。東京と大阪の郊外の住宅地からランダムに小学校を選んだ。小学校から半径500mの範囲内で調べてみた。東京も大阪もよく似ている。最低必要なコンビニ、スーパー、銀行、飲食店、郵便局、交番、ほとんど揃っている。小学校区は、小学生が歩いて通う範囲なので、空間的にも根拠がある。イギリスは小学校区でやっているが、われわれは何を目標にするか。町内会では狭いかも知れない。それにいろいろな人間関係やボス支配でやっかいである。再編成をすとしても、いきなり小学校区では問題もあるだろうから、時間をかけてやるべきだろう。そして小学校がなくなったら、空き教室を上手く利用してコミュニティセンターに活用する。そういうことが起こりうると思ふ。一宮市では、地域ふれあい課、地域協議会など、「地域」を掲げた政策をしている

が、まだ中身が煮詰まっていない。どうしているかという、どこかのコンサルタントに作ってもらっている。市民が作れる仕組みを考えるべきだろう。120:00

- ・都市圏ということについて触れておきたい。資料7は、総務省が地域政策のひとつの指針として、定住自立圏というものを策定している。濃尾平野は、生まれてから死ぬまで、そんなに不満なく生活できるところのようである。つまり定住圏を実体化しているところといえる。三河も含めて、愛知県は定住条件が揃っているところといえる。では、何が足りないか。アクセントが足りないと思う。このような定住自立圏構想をもっと使うべきだろう。イギリス人は、**city and it's region** という言い方を好む。**Manchester and it's region** など。そうすると、**community and it's region**。都市には、それに必ず付属した空間が存在している。その空間は何か。市街地だけではなく、通ってくる通勤者の住まいを含めての **region** である。だから、都市と都市圏という言い方が必要である。日本でも、都市圏という考え方で国づくりをしようと考えたことがあった。1977年の第三次全国総合開発計画がそうである。私も委員として動いた経緯がある。資料6-1は、一宮周辺の江戸時代の集落分布で、基礎的なコミュニティの存在を示している。農村とその周りの農耕地という関係にはなっていないが、今でも確認できる。
- ・最後に今日の講義で最も言いたいことは、最近はやりのコミュニティ論に惑わされないで、歴史の中で持ってきたコミュニティの意味をよく考えて欲しいということ。そうしないと学問のガラパゴス化が進む。その責任はマスコミが大きい。また、出版社の編集者の力量も大きく、最近粗製濫造の新書が多い。ついでに言えば、『里山資本主義』のタイトルも偽装表示である。産業資本主義、金融資本主義という場合、資本主義は産業がつくる、金融が資本主義をつくるが、里山が資本主義をつくるのか、と言いたい。里山を資本主義的に使うことは可能だが、里山で資本主義は成り立たない。そういう意味で偽装表示だ。次回は、生活空間その2ということで、「郊外」の話をしたい。これも今日のコミュニティと同じで、最近の郊外論はちょっとおかしいということになりそうである。

以上